

## 母親と娘の関係

— 夫との関係を中心に —

白百合女子大学 高木紀子

白百合女子大学 柏木恵子

### Mother's Emotional Bond with Adolescent Daughter

Shirayuri College TAKAGI, Noriko

Shirayuri College KASHIWAGI, Keiko

子どもの価値は、近年の社会文化的経済的状況の変化に伴い、変化してきている。子どもに精神的価値を期待する中で、親による子どもの性別選好がなされ、息子と娘とでは親にとっての意味や価値は異なるものと予想される。本研究では、まず、青年期の娘に対する母親の期待や感情を、息子に対するものと比較し、母親と娘の関係の特殊性を把握した。さらに、母親とその夫との関係から母親と娘の関係を検討した。結果は、母親の娘に対する期待・感情として、娘が理解者、娘からの世話期待、娘の人生への関与・介入、一心同体の因子が抽出された。母親の期待・感情は全ての因子で、息子に対してよりも、娘に対して高得点であったが、特に、「自分の理解者」であるという感情や「将来の世話期待」を強く抱いていることが認められた。母親における夫との関係構造は、相互愛情・信頼、円滑なコミュニケーション、夫の仕事中心傾向、コミュニケーションの不全、の側面から捉えられた。夫との関係が良好であるほど母親の「娘が理解者」という感情が低く、逆に関係が良好でないほど「娘が理解者」とする傾向が高まる様相が認められた。これらの結果は、臨床例からの知見、母親自身のライフコースや心理との関連から論じられた。

**【キー・ワード】**母親, 娘, 息子, 夫, 期待, 感情

Purpose of this study was to clarify the structure of mother's expectation and emotional bond with her daughter comparing the bond with her son and to examine the factors including mother's relationship with her husband affecting the strength of mother-daughter emotional bond.

Four factors were identified as mother-daughter bond, 1) mother's acknowledgment of daughter as empathetic understanding supporter, 2) mother's expectation for daughter as care-taker in mother's old age, 3) mother's strong concern / intervention in daughter's life, 4) mother's "one-ness" feeling with daughter. All the factors were significantly strong in mother-daughter bond than mother-son bond. Strength of mother-daughter bond was closely related with mother's relationships with her husband. Mother who was poor in mutual warm

love, interrelationships and trust with her husband tended to have stronger expectation and concerns for daughter.

The finding supports clinical reports on recent mother's over-expectation and emotional bond with her daughters. Mother / woman's psychological healthy development was discussed in relation to recent drastic social changes and cultural contexts in Japanese society.

**【Key Words】 Mother, Daughter, Son, Husband, Expectation, Emotional bond**

## 問題提起

世界の人口統計によると、合計特殊出生率（1995 - 2000）は、アフリカでは5.06と高く、オセアニアは2.38、そしてヨーロッパは1.42である。アジアをみると、全体の平均は2.60であるが、国によってばらつきは大きく、最も高いのはイエメンの7.60、最小値は香港の1.32となっている。日本は香港に次いで小さく1.43であり、アジア内で合計特殊出生率が2を切るのは、一人っ子政策の中国は別としても、極くわずかである。日本は、ヨーロッパ型の人口動態的状况と酷似した様相を呈していることがわかる。

日本の人口動態的变化には、少子化と長寿命化という2つの大きな変化がある。少子化の背景には、安全で確実な受胎調節や乳児死亡率の低下といった医学的知識や技術の進歩がある。子どもは、結婚したら妊娠し出産するという、自然な成り行きとしての“授かる”ものから、“つくる”ものへと変化した（中山，1992）。いつ、何人子どもを持つかは、選択の一つとなってきたのである。こうして、少産少子化が実現した。また、日本の古くからの食文化や生活習慣、そして、医療技術の進歩により、長寿命化が実現した。

長い人生の中で、少ない人数の子どもしかも、自分の意志決定の結果持つことにした子どもを育てることになり、子どもの価値と

いうものが大きく変わってきている。未発展、開発途上国がそうであるように、以前は、日本でも子どもは労働力や老後扶養などの実用的経済的価値をもっていた。しかし、いまや、子どもには、「親の楽しみ」とか「家庭を明るく」といったような精神的な価値を期待するようになってきた（阿藤，1996；日本女子社会教育会，1995）。

子どもの価値は、普遍のものであると考えられがちであるが、実はそうではない。数十年前の日本においても、子どもは農作業などに役に立つ「労働力」としての意味を持っていた。また、「老後は子どもたちが養ってくれる」として、経済的期待もされる存在であった。このことについて、動物のさまざまな種の中で子が親の面倒を見るという「役割逆転」が起こるのは、ヒトにおいてのみであると注目される場所である。しかし、時代は変わり、社会的・経済的状況が変わり、人々の価値観が変わってきた。経済的、実用的な価値ではなく、子どもを持つことはむしろお金のかかることでありながら、そこに精神的な価値を親は期待するようになってきたのである。

こうした背景の中で、親のもとから離れずに、まめまめしく家事などをこなし、親のそばにいて親の気持ちを汲んだり、楽しませてくれるなどの精神的意味をも含めて、親にとっては女の子（娘）が望ましいと言われる風潮になってきた。1人だけ子どもを持つとしたらどちらの性

別がよいかという質問に対して、最近では、圧倒的に女の子と答える親が多いのである(厚生省, 1993)。男の子を産んで一安心、はじめの子が女の子だったら次こそは男の子をとされた時代とは、性別選好が逆転したのである。

街では、そっくりな顔をした母と娘と一緒にショッピングや食事を楽しんでいる。その様子は、一卵性双生児さながらの仲の良さだと喻えられている(信田, 1998)。洋服の貸し借りをしたり、流行の歌を2人で口ずさんだりしている姿は、従来の親子の関係ではなく、友達のような関係に近いと思われる。

しかし、こうした仲の良い母娘関係が危うい、とする臨床家の見方も無視できない(信田, 1997; 中村, 1994; 高石, 1996)。一見、仲が良くて幸せそうに見えるが、娘の側では、母との関係に息苦しさを感じ、心身に問題が生じて、カウンセリングに訪れるケースが幾例もあると言う。母に喜ばれるようにと振舞うあまり、気が付くと自分自身の人生を生きている実感が得られない、また、母抜きで恋愛・結婚をして幸せになることに罪悪感を抱いてしまうというように、娘において母から自由になれないというのが、共通の問題である。

臨床的には、このように娘と母の関係が危機的になる場合、夫婦の関係にすれ違いが多いことや母親に自分を傾けるだけの人生目標がないなど、母親側の、母親自身の人生における問題、心理的葛藤の存在が指摘されている。母親自身が自立・自律した個人として存在していないことや、夫婦の関係のぐらつきから、母が娘に寄りかかり、娘の人生を侵食してしまう可能性が考えられるのである。つまり、母親は息子よりも娘こそを心理的に近いものとみなしている、

母親に心理的葛藤があると、母親は娘により密接な関係を求める、という仮説が提起できる。

では、実際にどのような母親が娘と密接な関係を持っているのであろうか。息子との関係以上に、娘と密接な関係を持つものなのであろうか。また、その背景は何であらうか。既述のような臨床的問題が顕在化していない一般的な家庭においても、臨床的に指摘されているような傾向が内在しているのであろうか。

大量な実証的データの収集、分析、検討をすることで、これらの疑問を解明する鍵が得られるであろう。大量な実証的データによる分析・検討は、今までになされなかった試みであり、現代の親子、特に母と娘の関係を捉える上で重要な知見を引き出せるものと確信する。

## 目 的

母親に焦点を当て、母親にとって「娘」とはどのような存在であるのか、息子とは違う意味を持つものであるのかを、まず、実証的に明らかにする。そして、母親と娘の关系到影響を及ぼす母親側の要因として、本研究では母親における夫との関係を取り上げ、母親において夫との関係と娘との関係がどう関連しているのかについて検討することを試みる。

こうした検討を通して、女性のライフコースにおける子どもの価値、とりわけ娘の価値、母親にとっての娘の位置について考察する。その視点から、人口動態的、社会経済的に変動しつつある社会の中での女性の生きがについて、また、親子関係のあり方について考察する。

## 方 法

### <手続き>

前述の仮説を検証するために以下の尺度を設け、質問紙法により調査を行った。

1. 母親が身近な人から受けている情緒的サポート  
 2. 娘への期待・感情  
 3. 息子への期待・感情  
 4. 夫との関係  
 5. 回答者の諸属性

び先行研究(井上ら, 1995; 平山 1999)などから, 夫との関係を測る項目群を選定し, 6件法による質問項目を作成した。

<調査尺度>

1. の項目選定について: 青年期の重要な他者を問う項目(柏木ら, 1997)を採用し, “自信, 慰め, 共感, 安定, 親近感” から成る情緒的サポート 10 項目について, 母親が身近な人からどの程度得ているかの回答を求めた。情緒的サポートを受け取る身近な人として, 夫, 娘, 息子, (実家の) 母, 友人の 5 者それぞれについて 3 段階(非常に当てはまる, やや当てはまる, 当てはまらない)の評定を求めた。
2. の項目選定について: まず, 大学生の娘を持つ母親に「娘に対してどういう思いを抱いているのか」についての非構造化面接を行った。そこから得られた娘に対する期待・感情を示す項目を中心に, さらに, 関連したテーマについての臨床方面からの知見(信田, 1998; 町沢, 1998), 新聞・雑誌の記事(朝日新聞, 1998; アエラ, 1998, 1999) から, 合計 21 項目を選定した。これを, 大学生の娘を持つ母親 178 名に 4 件法で回答を求める予備調査を実施し, 得られたデータについて因子分析により, 因子構造を確認するとともに, 因子負荷量の低い項目を削除した。その結果, 最終的に 4 因子 17 項目からなる項目群を「娘に対する期待・感情」の尺度として使用することとした。6 段階での評定を求めた。
3. については, 2. の 17 項目の「娘」という言葉をそのまま「息子」と直し, 使用した。
4. については, 既婚女性への半構造化面接及

<調査対象>

娘, 息子双方を持つ母親 245 名を対象とした。但し, 娘は大学生であることに限定し, 息子は, その上(兄)か下(弟)かは問わなかった。娘も息子も持つ親としたのは, 母親における娘, 息子の位置を相対的に捉える意図からである(表 1)。

<調査時期>

1999 年 9 月~10 月。調査の問題意識・目的, 研究者の紹介と共に質問紙を大学生である娘に託し, 自宅から通っている場合は母親に手渡し, 親と離れて暮らしている場合には母親の元に郵送してもらった。いずれの場合も母親からは回答の記入後, 返信用封筒にて返送を求めた。回収率は, 62.9%であった。

結果と考察

1. 母における娘・息子の位置

母にとって, 子どもの位置は, 子どもの性別, つまりその子が娘か息子かによって異なるのであろうか。

まず, 母が娘, 息子を含めて, 周囲の人から受けている情緒的サポートについて検討してみる。

母が情緒的サポートを得ている相手(夫, 娘, 息子, 実家の母, 友人)について, それぞれ 10 項目からなる質問項目の平均得点(range1~3点)を算出した。表 2 は, 母親が受けている情緒的サポートの量を, 夫, 娘, 息子, 実家の母, 友人ごとにそれぞれ比較したものである。夫からのサポートが一番高く, 次に, 娘, そして息

表1 調査対象に関する基礎的屬性

( )内は%

|               |   |             |
|---------------|---|-------------|
| 母親の年齢         | 平均 48.9歳<br>(SD3.47,年齢範囲40-61歳)   |             |
| 母親の年代         | 40歳代  | 141人 (57.6) |
|               | 50歳代  | 90 (36.7)   |
|               | 60歳代  | 1 (0.4)     |
|               | N.A.  | 13 (5.3)    |
| 母親の学歴         | 中高卒   | 82 (33.4)   |
|               | 短大・専門校卒   | 87 (35.5)   |
|               | 大学卒   | 64 (26.1)   |
|               | N.A.  | 12 (4.9)    |
| 母親の就労<br>就労形態 | 専業主婦  | 77 (31.4)   |
|               | 有職  | 157 (64.1)  |
|               | 外勤・常勤   | 36 (14.7)   |
|               | 外勤・常勤でない  | 82 (33.5)   |
|               | 内勤  | 6 (2.4)     |
|               | 自営業   | 24 (9.8)    |
| 仕事の継続状況       | その他   | 9 (3.7)     |
|               | ずっと継続   | 41 (16.7)   |
|               | 子育て期中断  | 104 (42.4)  |
| 夫(父親)の学歴      | 中高卒   | 57 (23.3)   |
|               | 短大・専門校卒   | 15 (6.1)    |
|               | 大学卒   | 158 (64.5)  |
|               | N.A.  | 15 (6.1)    |
| 夫(父親)の年齢      | 平均52.1歳<br>(SD4.29,年齢範囲43-74歳)  |             |
| 夫(父親)の年代      | 40歳代  | 57 (23.3)   |
|               | 50歳代  | 160 (65.3)  |
|               | 60歳代  | 11 (4.5)    |
|               | 70歳代  | 1 (0.4)     |
|               | N.A.  | 16 (6.5)    |
| 娘の年齢          | 全体平均 20.6歳<br>内訳<br>姉: 133人(18-30歳)<br>平均20.53歳<br>妹: 95人(18-27歳)<br>平均20.62歳 |             |
|               | 息子の年齢   |             |
|               | 全体平均 20.3歳<br>内訳<br>兄: 95人(21-31歳)<br>平均24.15歳<br>弟: 133人(10-27歳)<br>平均17.29歳 |             |

表2 母が得ている情緒的サポート量

|        | 平均値  | SD   |       |
|--------|------|------|-------|
| 夫から    | 2.50 | 0.48 | } *** |
| 娘から    | 2.29 | 0.41 |       |
| 息子から   | 2.08 | 0.48 | } *** |
| 実家の母から | 2.03 | 0.58 |       |
| 友人から   | 2.02 | 0.51 |       |

\*\*\* p<0.001

子の順になっている (p<0.001)。ここから、母親(妻)にとって、夫と娘とが、情緒面で重要な存在であることがわかる。

娘からの情緒的サポート量は、息子からの情緒的サポートより有意に高かった (p<0.001)。

つまり、母親は、子どもの中でも息子よりも娘からのサポートの方を、圧倒的に多く得ている。情緒的交流が、息子よりも娘と密になされている様相が示唆される。母親にとって息子は、家庭外の人物(実家の母、友人)と同じレベルであることが興味深い。

では、母親は娘や息子に対して、どのような期待や感情を抱いているのだろうか。母親は娘に対して息子とは違った「特別な」期待や感情を抱いているのであろうか。期待・感情の項目に関して、本調査で得られた回答について因子分析を行い、期待・感情の構造を検討した。その結果、累積寄与率が50%以上になること、さらに、因子内の係数が0.7を越えるものであることなどの条件を満たして、予備調査で得られたものと同様の4因子が抽出された(表3)。

第1因子は、(夫でなく)娘を自分の理解者として位置づけることに関する因子であり、「娘が理解者」因子と名付けた。

第2因子は、娘から~してもらいたいという将来にわたる期待であり、「娘からの世話期待」因子と名付けた。

第3因子は、将来の娘自身の人生への関与や介入を示すもので、「娘の人生への関与・介入」因子と名付けた。

第4因子は、娘と自分の親密さ、類似性を示すもので、「一心同体」因子と名付けた。

以上の、母親における娘への期待・感情4因子について、それぞれの得点を算出した(図1)。どの因子も正規分布し、かつ、どの因子も尺度の中央値3.5よりも高い平均値となっていて、回答の選択肢である「どちらかといえばあてはまる」「ややあてはまる」「非常にあてはまる」のいずれかを回答した人が過半数であった。

表3 娘に対する期待・感情

|                              | I      | II    | III    | IV     |
|------------------------------|--------|-------|--------|--------|
| 「娘が理解者」因子                    |        |       |        |        |
| ・夫よりも娘とのほうがわかりあえる            | 0.820  | 0.112 | 0.137  | 0.181  |
| ・夫よりも娘との会話の方が楽しい             | 0.762  | 0.076 | 0.041  | 0.089  |
| ・夫よりも娘の方が私の悩みを親身になって聞いてくれる   | 0.710  | 0.126 | -0.014 | 0.198  |
| ・娘は私の第一の相談相手だ                | 0.627  | 0.345 | -0.074 | 0.212  |
| ・夫とのことも娘になら相談できる             | 0.483  | 0.219 | 0.027  | 0.271  |
| 「娘からの世話期待」因子                 |        |       |        |        |
| ・娘にはできるだけ近くに住んでほしい           | -0.115 | 0.578 | 0.369  | 0.088  |
| ・私が病気の際には娘に看病してほしい           | 0.207  | 0.571 | 0.131  | 0.088  |
| ・娘が結婚しても今と同じに付き合いたい          | -0.049 | 0.520 | 0.154  | 0.063  |
| ・娘がいるので私の老後はさびしくない           | 0.188  | 0.511 | 0.065  | 0.090  |
| ・老後には、娘と旅をしたい                | 0.197  | 0.499 | 0.096  | 0.105  |
| 「娘の人生への関与・介入」因子              |        |       |        |        |
| ・娘には大学卒業後、私の意見も考慮した進路を選んでほしい | 0.085  | 0.252 | 0.678  | -0.095 |
| ・娘には、私の気に入るような結婚相手を選んでほしい    | 0.180  | 0.188 | 0.628  | -0.065 |
| 「一心同体」因子                     |        |       |        |        |
| ・私と娘とは気が合う方ではない              | -0.165 | 0.083 | 0.099  | -0.594 |
| ・娘と私は考え方や行き方が違う              | 0.044  | 0.045 | -0.235 | -0.507 |
| ・娘と私は仲の良い友達である               | 0.327  | 0.272 | -0.045 | 0.506  |
| ・娘と一緒にいると楽しい                 | 0.066  | 0.206 | -0.051 | 0.501  |

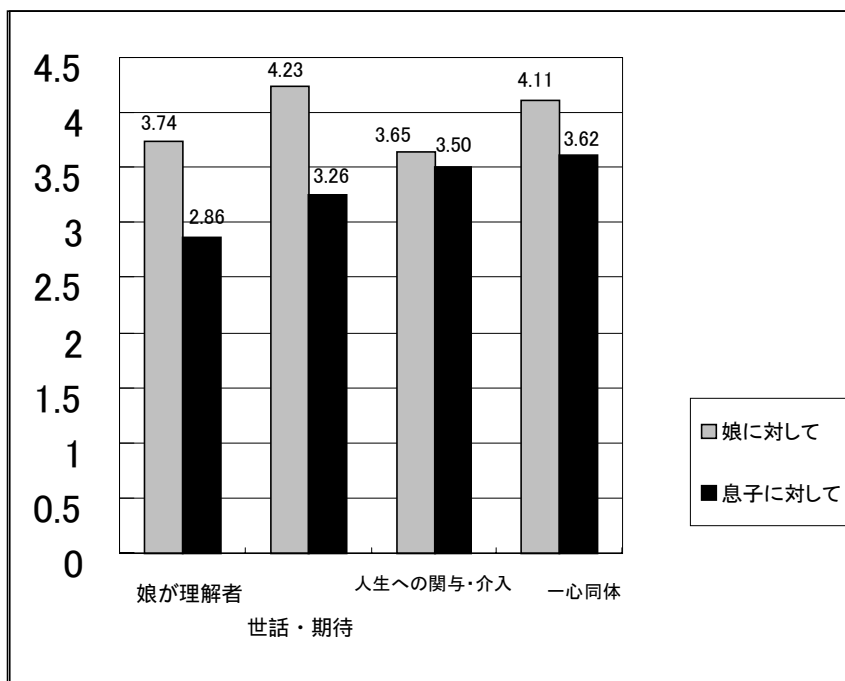


図1 母親における娘/息子への期待・感情の得点

息子に対する期待・感情も同じ項目でまとめ、(る)比較した(図1。娘,息子いずれの因子も = .70を上回っており、信頼性は確認されてい 全ての因子について、t検定の結果、娘に対

しての得点と息子に対しての得点間に有意差が認められた( $p < 0.001$ )。

母親の息子と娘に対する期待・感情は、強さの上で明らかに異なり、将来に対するしてもらいたいという期待や娘の人生に介入していきたいという希望、また、現在、娘を理解者だとする気持ち、自分とは一心同体のものであるという気持ちの全てにおいて、息子よりも娘に対しての方が高いことが示された。つまり、母は娘とは息子以上に特別で密接な関係を持っていると言えよう。

また、娘だけに注目して4因子の得点を比べてみると、因子間の得点の高低差が大きく、t検定の結果、第1位から第4位まで全ての順位間に得点の有意差が認められた(第1位と第2位の間は $p < 0.01$ , 他は $p < 0.001$ )。1番得点が高いのは、「娘からの世話期待」であり、「娘の人生への関与・介入」が1番低くなっている。どちらも、現在の娘との関係についてではなく、将来的な時間軸の上での期待や希望である。しかし、直接に娘の人生に関与し介入する「娘の人生への関与・介入」よりも、母親自身が見返りを期待する「娘からの世話期待」が高いことは、注目に値する。

一方、息子について同様に4因子の得点を比較してみると、娘についてとは異なる得点分布を示している。「一心同体」が1番高く、ついで、「人生への関与・介入」が高い。t検定の結果、この両得点間には有意な差は認められず、ともに1位の位置づけと言える。その後続く「息子からの世話期待」、「息子が理解者」因子の間には、有意差が認められた( $p < 0.001$ )。

娘、息子についての因子の順位を比較してみると、息子については「人生への関与・介入」が上位で「将来的世話期待」が下位であり、実に、娘についての順位とは対照的な様相を示し

ている。息子については「自分がしてもらいたい」という将来的世話期待はさほど優位なものではなく、「こうあって欲しい」という人生への関与・介入の方が優位となっている。

つまり、母親は息子に対して将来的に、直接自分自身が見返りを得る部分ではないところに強い期待を持っているのであり、息子は親である自分とは独立した存在、別の人生であるという意識の上で、息子との関係を持っていると言えよう。他方、娘に対しては、自分の「理解者」であると感じ、将来的にも自分への見返りを強く期待している様相が見られ、同じ子どもでも、息子と娘とでは対照的な期待・感情を持っていることが推察される。

また、「一心同体」因子に関しては、娘、息子とも上位の位置を占めている。しかし、息子における4因子の順位で、「息子が理解者」が1番低くなっていることを考え合わせると、息子への一心同体感は母親自身が精神的に依存してしまうほど深いものではなさそうである。「自分と似ている」「楽しい」などの、いわば表面的な一体感ではないかと推察される。

母親において、娘と息子とでは、期待・感情が強さで示されるような量的なもののみならず、質的にもその関係のあり方が異なっている可能性が推察される。

このように、一般に母は娘に対して、親しい感情を持ち、将来にわたり自分とつながっていることを期待しており、心理的距離が近いことがわかる。言い換えれば、母は娘に対して親しいあまり、娘との境界が曖昧になり、結果として娘の人生に支配的に関与することになる可能性が窺える。

しかし、全ての母親が、娘に対してこうした期待や心理を持っているとは限らないであろう。

表4 「娘が理解者」因子における3群の分布

|      | 人数 (全体に対する%) |      |
|------|--------------|------|
| D>S群 | 104          | 42.4 |
| D=S群 | 16           | 6.5  |
| D<S群 | 34           | 13.9 |

では、どの程度の母親が、娘と際立って密な関係をもっているのでしょうか。この様相を探るために、第1因子である「娘(息子)が理解者」について、娘の方が息子よりも高い(D>S群:娘のスコアの方が1.0以上大きい)群、娘と息子とが同等である(D=S群:娘と息子のスコアが全く同じ)群、娘の方が息子よりも低い(D<S群:息子のスコアの方が1.0以上大きい)群の3群を抽出した。その人数・パーセントは、表4の通りである。

比率としては、D>S群が圧倒的に大きいですが、D=S群や、D<S群が少なからず存在していることがわかる。

## 2. 娘との距離を規定する要因 基本的属性

1. では、母は娘に対して息子よりも多くの期待・感情を抱いていることが示され、またその期待・感情そのものも、質的に異なるものであることが示唆された。

さまざまな調査では、女性の高学歴化に伴い、女性自身の価値観や子どもとの関係が変化していることが、明らかにされている(柏木・若松1994, 柏木・永久1999)。では、娘との関係についてはどうであろうか。

まず、前述のD>S群、D=S群、D<S群の3群について、母親の年齢、子どもの人数を従属変数とする一元配置の分散分析を行った。また、この3群と学歴、就労(職の有無、就労形態、職の継続状況)、娘の同居・非同居について、カイ2乗検定を行った。その結果、これら基本的属性に関して有意な結果は得られなかつ

た。

さらに、母親の属性について、娘への期待・感情4因子との関連を検討した。関連が見出されたのは、学歴、子育て期の就業継続、娘との同居・非同居についてであった(表5~表7)。子どもの人数、夫の学歴、妻・夫の年齢、妻の職の有無・形態に関しては、有意な結果は得られなかった。

表5にあるように、母の学歴3水準(中高卒、短大専門学校卒、大卒)で、娘に対する期待・感情各因子を検定変数とし、一元配置の分散分析を行ったところ、「娘が理解者」因子について学歴間で有意差が認められた( $p<0.01$ )。多重比較(Tukey)によると、差のあるのは中高卒と大卒間であり、中高卒の方が大卒よりも「娘が理解者」の因子得点が高かった。すなわち、高学歴の母親は、そうでない母親に比較して、娘を理解者として位置づけることが少ない。これは、高等教育を受けたものの方が、娘を理解者と位置付けなくとも済む、「何か」を持っているということではなからうか。理解者としての因子に関連する属性は学歴だけであったので、この「何か」は「職業」と直接は関連してはいないようである。さらに、娘への期待・感情それぞれの因子について、学歴3水準(中高卒・専短卒・大卒)と職業3水準(専業主婦・外勤パート・外勤フルタイム)について、2元配置の分散分析を行ったところ、交互作用の有意な効果は見られないことが確認された。

では、母親の学歴の効果を、母親と娘との学歴差と捉えるとどのような解釈が可能であろうか。今回の調査は、娘は大学生に限定されているので、母親の学歴の高低は、そのまま母親娘間の学歴差に結びついている。母親が大卒である場合には母親-娘間の学歴差は無いに等し



表5 娘への期待・感情--母親の学歴別

|             | 中高卒  |      | 短大専門学校卒 |      | 大卒   |      | 有意差    |
|-------------|------|------|---------|------|------|------|--------|
|             | M    | (SD) | M       | (SD) | M    | (SD) |        |
| 娘が理解者       | 3.98 | 1.15 | 3.73    | 1.01 | 3.43 | 0.99 | p<0.01 |
| 娘からの世話期待    | 4.39 | 0.89 | 4.23    | 1.01 | 4.09 | 0.99 | n.s.   |
| 娘の人生への関与・介入 | 3.66 | 1.26 | 3.70    | 1.20 | 3.53 | 1.31 | n.s.   |
| 一心同体        | 4.14 | 0.80 | 4.11    | 0.82 | 4.04 | 0.98 | n.s.   |

表6 娘への期待・感情--母親の子育て期の就業継続別

|             | 継続群  |      | 中断群  |      | 有意差    |
|-------------|------|------|------|------|--------|
|             | M    | (SD) | M    | (SD) |        |
| 娘が理解者       | 3.63 | 1.21 | 3.77 | 1.07 | n.s.   |
| 娘からの世話期待    | 4.57 | 0.85 | 4.20 | 0.98 | p<0.05 |
| 娘の人生への関与・介入 | 3.76 | 1.47 | 3.69 | 1.26 | n.s.   |
| 一心同体        | 4.04 | 0.90 | 4.12 | 0.86 | n.s.   |

表7 娘への期待・感情--同居・非同居別

|             | 同居   |      | 非同居  |      | 有意差    |
|-------------|------|------|------|------|--------|
|             | M    | (SD) | M    | (SD) |        |
| 娘が理解者       | 3.67 | 1.06 | 3.91 | 1.11 | n.s.   |
| 娘からの世話期待    | 4.18 | 0.93 | 4.45 | 1.01 | p<0.05 |
| 娘の人生への関与・介入 | 3.59 | 1.13 | 3.77 | 1.53 | n.s.   |
| 一心同体        | 4.02 | 0.86 | 4.33 | 0.79 | p<0.05 |

く、母親が中高卒である場合母親 - 娘間の学歴差は大きくなっている。つまり、学歴差が大きく、娘の方が高い水準の教育を受けている場合の方が、学歴水準が同じ場合よりも、娘が母親から頼られ理解者として位置づけられている可能性が推察される。母親自身の受けた教育水準の高低そのものが娘との関係に影響を及ぼしているのか、あるいは、母親と娘の学歴差がその関係に影響を及ぼしているのであろうか。今回の調査では、大学生以外の娘に関するデータが得られていないが、この可能性について、さらなる検討が期待されるところである。

母の職業形態 3 水準（外勤フルタイム・外勤パート・専業主婦）で、娘への期待・感情因子得点を検定変数とし、一元配置の分散分析を行ったところ、有意差は見出されなかった。しかし、現在仕事を持っている母親について、子育て期の職業の継続状況別に、継続群、中断群とで 4 因子を t 検定にて比較したところ、「娘か

らの世話期待」因子で有意差が見出された（表 6）。ずっと仕事を継続している群の方が、子育て期は仕事を中断していた群よりも、「娘からの世話期待」得点が高い(p<0.05)という結果であった。

この理由については、次のように推測される。子育て期も職業を継続している人の人的ネットワークは、当然、職業を中心としたものになっているだろう。それは職業生活という枠組みの中でのものとみなされ、「老後」を迎えたときにそのネットワークは失われてしまうものだとして認識しているであろう。そのことが、娘に「将来の世話をしてもらいたい」という期待を高くさせているということであろうか。

また、子育て期の職業継続と「夫との関係」が関連を持っていることも、この結果の解釈には見逃せない。この点については 3. で詳しく述べることにしたい。

また、娘との同居・非同居により、娘への期

待・感情各因子得点について、t検定を行ったところ、娘と同居していない母親群の方が、「娘からの世話期待」と「一心同体」因子が高かった( $p < 0.05$ , 表7)。一緒に生活しているほうが、娘に対する一心同体感も増すだろうし、将来に対する期待も大きくなるのではないかという、単純な予想とは逆の結果である。

「主たる養育者としての母親よりも、父親のほうが子どもに対する分身感が高い」(柏木・若松 1994)という先行研究の知見が得られている。分身感とは子を自分の身を分けた存在と見なす感情であり、自分との類似性、共通性を認めている点で、ここでいう一心同体感と同質のものと言えよう。母親は、毎日子どもと向き合い、さまざまな現実を突きつけられていて、分身感といった甘美な思いよりも、子どもは自分を制約するもの、思い通りにならないもの、自分と対立したものと捉える。一方、父親は、遊ぶとか寝顔を見るとか、一歩引いた接触しかしていないので、分身感のような甘美な思いを抱きつづけられるものと解釈される。非同居群の方が一心同体感が高いという本研究の結果は、先行研究とは子どもの年齢は違うものの、内容的に一致したものと言えよう。娘と毎日顔を合わせて暮らしていく中では、娘との対立や衝突もあるし、「一心同体」感や「娘からの世話期待」という期待は大きくならないのであろう。ところが、娘が下宿や寮に入って、手元から離れてしまうと、日常の衝突や現実的な問題から開放されて、「一心同体」感や「娘からの世話期待」という思いが高くなるのではないだろうか。一緒に暮らしていないということは、親には経済的負担や、ちゃんとやっているかという心配などが増える一方で、「一心同体」感や「娘からの世話期待」という甘美な思いが保たれやすいという側面を持つものと言えよう。

### 3.娘との距離を規定する要因 夫との関係から

#### 「夫との関係」の因子構造的把握

日常的な夫との関係を測る項目について、質問項目群の構造を検討し比較の軸となりうる有意な次元の特定を探るために、探索的に因子数を3から7までの主成分分析・バリマックス回転を行った。累積説明率が50%を超えること、因子の安定性と解釈可能性の条件から、次のような4因子に決定した(表8)。

第1因子は、「(私は)夫を愛している」「夫は私を愛している」など、双方向の夫婦の愛情・信頼を示す項目群からなるので「相互愛情・信頼」の因子と名付けた。

第2因子は、「(夫は)私の話を楽しそうに聞く」、「(夫は)自分のことを話す」などの他、実際の共行動を示すことがらも含まれている。共行動もひとつのコミュニケーションであると解釈すれば、これはコミュニケーションが双方向に円滑になされていることを示す因子である。そこで、「円滑なコミュニケーション」因子と名付けた。

第3因子は、「夫は仕事で頭がいっぱい」「夫は家庭より仕事を優先する」など、夫の仕事中心の様子を示す項目群からなるので、「夫の仕事中心」の因子と名付けた。

第4因子は、「(夫は)暴力を振るう」、「(夫は)家ではすぐ怒る」など、意志の疎通がはかれないような状態、コミュニケーションがうまく取れていないような状態を示す項目群から成る。この因子は「コミュニケーションの不全」因子と名付けた。

4因子中、コミュニケーションに関する因子が2つ捉えられた。従来の研究では、ひとつの

因子として扱われることが多かったコミュニケーションであるが、これが円滑さと不全という相反する2軸で、分離して考える可能性が示されたと言えよう。

また、夫が仕事中心的態度であることも、「相互愛情・信頼」や「円滑なコミュニケーション」、「コミュニケーションの不全」とも独立して、別の軸として捉えられることが示された。

以上の4因子の得点を比較してみよう(表9)。全体に、相互愛情・信頼因子の得点が高く(M=4.32)、また、コミュニケーションの不全は低く、円滑なコミュニケーション得点は高い。全体としては円満な夫婦が多いことがわかる。仕事中心に関しては、正規分布よりもやや高得点に偏っている。これは、回答者が、私立女子大学の親を対象としたものであり、高学歴層・高所得層に偏っていることとの関連であると考え

表8 夫との関係34項目の因子分析

|  |                      | 成 分    |        |        |        |
|--|----------------------|--------|--------|--------|--------|
|  |                      | 1      | 2      | 3      | 4      |
| 相互愛情・信頼  | 夫を愛している              | 0.873  | 0.158  | -0.072 | -0.217 |
|  | 夫と仲がよい               | 0.834  | 0.268  | -0.140 | -0.278 |
|  | 夫のために心から尽くせる         | 0.824  | 0.237  | -0.048 | -0.231 |
|  | 夫の愛情を十分に感じることができる    | 0.814  | 0.272  | -0.161 | -0.171 |
|  | 夫と自分の相性は良い           | 0.794  | 0.130  | -0.149 | -0.247 |
|  | 夫となら困難にもうまく対処できる     | 0.768  | 0.253  | -0.128 | -0.261 |
|  | 私を愛している              | 0.747  | 0.213  | -0.122 | -0.039 |
|  | 夫と十分なコミュニケーションをとっている | 0.732  | 0.425  | -0.205 | -0.194 |
|  | 夫と気軽に会話が楽しめる         | 0.709  | 0.409  | -0.292 | -0.186 |
|  | 私を十分助けてくれる           | 0.670  | 0.415  | -0.258 | -0.224 |
|  | 旅行に行くなら夫がよい          | 0.615  | 0.330  | -0.200 | -0.179 |
|  | 夫にしか話せないことある         | 0.607  | 0.279  | 0.052  | -0.003 |
|  | 夫の稼ぎに満足している          | 0.578  | -0.090 | -0.085 | -0.141 |
|  | 食事に行くなら夫がよい          | 0.574  | 0.434  | -0.158 | -0.059 |
| 夫のために若さを維持する努力   | 0.518                | 0.288  | -0.010 | -0.022 |        |
| 円滑な<br>コミュニケーション   | 私の話を楽しそうに聞く          | 0.424  | 0.688  | -0.187 | -0.153 |
|  | 自分のこと話す              | 0.433  | 0.652  | -0.151 | 0.041  |
|  | 一日の出来事を話す            | 0.442  | 0.622  | -0.206 | -0.125 |
|  | 私の話を聞く               | 0.506  | 0.618  | -0.188 | -0.253 |
|  | 相談相手は私               | 0.444  | 0.573  | -0.158 | -0.062 |
|  | 私の話をながらで聞く           | -0.019 | -0.546 | 0.048  | 0.242  |
|  | 一緒に買い物に出かけるほうだ       | 0.318  | 0.498  | -0.286 | -0.104 |
|  | 一緒に食事に出かけるほうだ        | 0.439  | 0.488  | -0.199 | -0.005 |
| 仕事中心   | 仕事で頭いっぱい             | -0.185 | -0.116 | 0.883  | 0.166  |
|  | 仕事で心身のエネルギーいっぱい      | -0.091 | -0.102 | 0.828  | 0.137  |
|  | 家庭より仕事を優先            | -0.077 | -0.062 | 0.801  | 0.058  |
|  | 家にいる時間短い             | -0.046 | -0.179 | 0.800  | 0.022  |
|  | 子どものことはまかせっきり        | -0.258 | -0.281 | 0.633  | 0.190  |
|  | 家のことあてにできない          | -0.146 | -0.417 | 0.461  | 0.296  |
| コミュニケーションの<br>不全   | 暴力を振るう               | -0.224 | 0.060  | 0.108  | 0.761  |
|  | 家ではすぐ怒る              | -0.212 | -0.145 | 0.064  | 0.738  |
|  | 軽く見るような態度            | -0.275 | -0.473 | 0.122  | 0.562  |
|  | 自分に都合が悪いと黙り込む        | -0.159 | -0.167 | 0.224  | 0.507  |
|  | 言っても無駄で言わないことある      | -0.121 | -0.414 | 0.163  | 0.469  |
| 因子抽出法: 主成分分析・回転法: Kaiserの正規化を伴うバリマックス法<br>9回の反復で回転が収束しました。 |                      |        |        |        |        |

表9 夫との関係因子—全体および母親の子育て期の就業継続別

|              | 全体   |      | 継続群  |      | 中断群   |      | 有意差    |
|--------------|------|------|------|------|-------|------|--------|
|              | M    | (SD) | M    | (SD) | M     | (SD) |        |
| 相互愛情・信頼      | 4.32 | 1.07 | 4.55 | 0.97 | >4.12 | 1.13 | p<0.05 |
| 円滑なコミュニケーション | 4.03 | 0.97 | 4.13 | 0.91 | 3.81  | 1.17 |        |
| 夫の仕事中心       | 3.56 | 1.25 | 3.33 | 1.15 | 3.57  | 1.20 |        |
| コミュニケーションの不全 | 2.85 | 1.04 | 2.72 | 0.91 | 2.86  | 1.17 |        |

られる。

次に因子間関係を見ている(表10)。「相互愛情・信頼」は、「円滑なコミュニケーション」因子と相関していた( $r=.779$ )。また、逆に「夫の仕事中心」と「コミュニケーションの不全」が相関していた( $r=.466$ )。愛情・信頼感がコミュニケーションを円滑にし、また、円滑なコミュニケーションが相互愛情・信頼感を高めるということは、日常的な感覚として納得のゆく結果である。そして、夫が仕事中心であることとコミュニケーションが不全であることが連動していることも、日常の経験と一貫した結果と言えよう。

### 基本的属性との関連

次に、年代、職業、子どもの人数などの基礎的属性について、夫との関係因子の得点をt検定により比較した。年代、職業の有無、子どもの人数に関しては、それぞれの因子の得点に有意な差は見られなかった。しかし、現在仕事を持っている母について、子育て期の職業継続状況別にみると、夫に対する「相互愛情・信頼」得点において、継続群の方が中断群よりも有意に高かった( $p<0.05$ , 表9)。

母親の子育て期の職業継続状況は、人数で見ると、中断群が継続群の2倍以上を占めている(表1)。しかし、少数派である継続群の方が、夫との相互愛情・信頼の得点は有意に高かった。継続群、中断群も4因子の得点順位は一見同じである。しかし、群内での因子得点を分散分析により比較してみると、継続群では1位から4

位までの得点に有意な差が認められるのに対し、中断群では第2、第3因子間、つまり円滑なコミュニケーションと夫の仕事中心に有意差があり、夫の仕事中心の度合いが強いことがわかる。こうしたことが、継続群と中断群における相互愛情・信頼の得点の有意差の背景にあるものと考えられる。ここに、夫が仕事中心的であり、コミュニケーションが不全となることもある中で、妻が自分の職業を中断し、家事や子育てに専念することになっていった状況が窺い知れる。

この結果は、「もう一度結婚するとしたら？」の問いに、有職の妻の方が無職の妻よりも「今の夫と結婚する」という答えを多くした先行研究(柏木ら, 1996)の結果とも一致する。妻の職業の有無が、夫との愛情・信頼と連動するという興味深い現象を示す結果である。そして、本データの中からは、最終的に有職であるか否かではなく、子育て期を通して有職であったか否かが、妻の意識において大きな意味を持っている可能性が新しく示された。言い換えれば、時間軸上の「点」としてある時点の有職・無職を捉えるのではなく、継続する「線」として捉えるべきである可能性が示唆されたことでもある。今や、ライフヒストリー研究が心理学の新領域として脚光を浴びつつある。あくまでフェイズシートの問題として扱われかねない有職・無職という属性についても、ライフヒストリーの視点から捉えることの意義が示されたとも言えよう。

### 夫との関係と娘への期待・感情

表10 夫との関係因子 因子間の相関

|              | 愛情・信頼     | 円滑なコミュニケーション | 夫の仕事中心   | コミュニケーションの不全 |
|--------------|-----------|--------------|----------|--------------|
| 相互愛情・信頼      | 1.000     |              |          |              |
| 円滑なコミュニケーション | 0.779 **  | 1.000        |          |              |
| 夫の仕事中心       | -0.425 ** | -0.504 **    | 1.000    |              |
| コミュニケーションの不全 | -0.570 ** | -0.520 **    | 0.466 ** | 1.000        |

\*\* :  $p<0.01$

では、夫との関係が、母と娘との関係にどのように影響を及ぼしているのだろうか。この点を明らかにするために、夫からの情緒的サポートの相対量（他者からのサポートに対する相対量）、夫との関係 4 因子それぞれと、母から娘への期待・感情得点との相関を調べてみたのが表 11 である（夫からのサポート量は点の付け方の甘い人とそうでない人との差を排除すべく 5 者からのサポートに対する相対量として扱うこととした）。夫からの情緒的サポートの相対量は、母の娘に対する「娘が理解者」、「一心同体」感と有意な負相関を示している（それぞれ  $p < 0.01$ 、 $p < 0.05$ ）。具体的にいうと、夫の情緒的サポート量が大きいほど娘を理解者として位置づけないし、娘に対して一心同体感を持たなくなるといふことである。これは、臨床現場から多々ある指摘「（一卵性母娘のような密着関係は）殆どが母親の不幸、家庭内離婚が背景」（信田，1997）、「夫と妻の空虚な関係が、母と娘を密着させる」（中村，1994）などとも一致する結果である。

また、夫からの情緒的サポートの相対量は、母の娘に対する「現在の感情側面」と関連しているとも言うことができる。夫からサポートを多く得ているか否かは、現在の娘の位置づけ・感情と相関するが、将来的な期待とは相関していない。夫からのサポートが少ない母親は、現状面での娘の心理的位置づけはかなり自分に近いところにある。そうならば、将来にわたる期待も高くなってしかるべきであるとも予想され

る。しかし、結果は違った。先に見た「子育て期もずっと職業を続けてきた母親において、将来にわたる娘への期待が高かった」という結果と合わせて考えてみよう。職業継続群、つまり一方でまた、夫からサポートを得て、子育て期も就業を続けた母親たちも、娘への将来の期待が高くなっているのである。夫からのサポートが少ないことで娘に将来的期待が高まる母親がいる一方で、夫からのサポートが多い職業継続群の母親においても娘に将来的期待が高くなり、相殺し合っているのではないかと考えられる。

では、夫との関係の質的構造面から見てみると、母親と娘の関係はどうなっているのだろうか。

「相互愛情・信頼」、「円滑なコミュニケーション」、「夫の仕事中心」、「コミュニケーションの不全」のすべての因子が、「娘が理解者」と高い相関を示している（すべて  $p < 0.01$ ）。但し、「相互愛情・信頼」、「円滑なコミュニケーション」とは負相関で、「夫の仕事中心」、「不全的コミュニケーション」とは正相関である。夫との相互愛情・信頼感が高ければ、また、夫とのコミュニケーションが円滑であるほど、母親における「娘が理解者」という感情は少なくなるのである。そして、夫の仕事中心の度合いが強くと、夫とのコミュニケーションが不全であるほど、「娘が理解者」の感情が高くなってくる。これも、「（一卵性母娘のような密着関係は）殆どが母親の不幸、家庭内離婚が背景」（信田，1997）、「夫と妻の空虚な関係が、母と娘を密着させる」

表 11 娘への期待・感情に関連する母側の要因

|       |              | 娘に対する期待・感情 |          |             |        |        |   |
|-------|--------------|------------|----------|-------------|--------|--------|---|
|       |              | 娘が理解者      | 娘からの世話期待 | 娘の人生への関与・介入 | 一心同体   |        |   |
| 夫との関係 | 情緒的サポート相対量   | -0.505     | **       | -0.102      | -0.037 | -0.166 | * |
|       | 相互愛情・信頼      | -0.303     | **       | 0.156       | 0.038  | 0.092  |   |
|       | 円滑なコミュニケーション | -0.188     | **       | 0.195       | 0.063  | 0.170  | * |
|       | 夫の仕事中心       | 0.281      | **       | 0.020       | 0.066  | 0.062  |   |
|       | コミュニケーションの不全 | 0.390      | **       | 0.047       | 0.026  | -0.053 |   |

\*\* 相関係数は1%水準で有意（両側）

\* 相関係数は5%水準で有意（両側）

(中村, 1994)という臨床現場からの指摘と一貫する結果である。

当初,こうした臨床現場で得られた知見から,母親における娘への期待・感情因子と夫との関係因子とは,全て一義的な方向性を持つ。夫との関係が円満であれば娘に対する期待や感情は小さなものになるだろう,逆に夫との関係が円満でない場合には,娘に大きな期待や感情を持つだろうと予想していた。つまり,夫との「相互愛情・信頼」と「円滑なコミュニケーション」が低く,夫が「仕事中心的」で「コミュニケーションの不全」が高い場合には,「娘が理解者」という感情のみならず,「娘からの世話期待」や「一心同体感」をも,高くなるものと予測していた。

ところが統計分析の結果では,夫との「相互愛情・信頼」と「円滑なコミュニケーション」は,「娘からの世話期待」とは負相関ではなく正相関していた(それぞれ  $p<0.05$ ,  $p<0.01$ )。また,夫との「円滑なコミュニケーション」と娘に対する「一心同体」も正相関していた( $p<0.05$ )。夫との関係が良好であるほど,母親は娘に対して将来的世話を一層期待したり,一心同体だという気持ちを抱いているのである。このことから,当初は予想しなかった「娘からの世話期待」因子や「一心同体」因子の別の意味合いが示唆される。夫との「相互愛情・信頼」が強いほど,また,「円滑なコミュニケーション」であるほど,「娘からの世話期待」を持つ,あるいは逆に夫との「相互愛情・信頼」が低いほど,また「コミュニケーションが円滑」でないほど,「娘からの世話期待」を持たないというように,夫との「相互愛情・信頼」や「円滑なコミュニケーション」の反映として,「娘からの世話期待」や「一心同体」因子が存在するのである。「娘からの世話期待」や「一心同体」の因子は,夫との関係

と連動しており,夫も娘も同じような位置づけ,家族全体の仲の良さ,家族全体が密接な様子を反映するものだという事もできよう。夫との関係の空虚さを埋め合わせるためだけに,娘が母親の心の中で大きな位置を占めているわけではない,夫への代償としてだけ娘が存在するわけではないことが示唆される。

このように考えると,先に見た「母親の子育て期職業継続群は,夫との相互愛情・信頼得点が高かった」結果と,「職業継続群(や夫から情緒的サポートを多く得ている母親群)で,娘への将来的世話期待が高かった」結果は,矛盾なく一貫する結果であることがわかる。家族全体の良好な関係の中で,母親が将来的にもその家族の中からの世話を期待していると考えられる。

以上の結果から,まず,母親における夫との関係の希薄さと娘への感情の一部分「娘こそが自分の理解者である」という母親の感情とが,連動していることが示された。この結果は,臨床例に見る家族内の力動が,問題の顕在化していない一般家庭においても当てはまることを示すものである。

しかしまた,母親における娘への将来的世話期待については,単に,夫婦間が希薄であるから娘に期待が高まるというものではないことがわかった。夫ともうまくいっており,娘にも世話期待が高いというような,家族全体の絆の強さの上で娘に将来の世話期待をする傾向も認められた。夫との関係がうまくいかない場合の代償としてではない娘の位置も確認された。

## 全体的討論および今後の課題

本研究では,「母における娘への思い」の構造を探り,それは,現在の娘に対する感情や,将

来にわたる期待から構成されていることが確認された。また、これらの因子について息子と娘との比較をすると、圧倒的に娘の方が高得点であった。母親においては、娘と息子とでは明らかにその期待や感情の強さが異なることがわかった。

さらに、夫婦の関係がこれらに影響する要因であることが確認された。夫婦の関係は、夫との相互愛情・信頼、円滑なコミュニケーション、コミュニケーションの不全、さらに、夫の仕事中心の度合いから捉えられた。そして、これらの夫婦の関係が、母親における娘の現在の位置づけや感情と、関連していることが確認された。夫との関係のどの因子も、関係が良好でない方向性を持つ場合に、母親において娘を理解者として位置づける傾向が認められた。母親が娘を自分の理解者として位置づけている背景には、夫との関係において、満たされないものを埋め合わせようとする心理的な作用のあることが窺える。つまり、既に臨床の現場で、問題の顕在化した家庭に見出されているのと同じ傾向が、いわゆる一般の家庭内にも認められたわけである。これは、臨床例の解釈をそのケースの“特殊性” その人個人の状況やその病前性格に求めるだけでは充分でないことを示すものである。ある時代には有効であったはずの夫婦の性役割分業、そこから生じる夫婦の心理的距離、そうした夫婦の関係のあり方が、今や限界にきていることが根底にはあることを個々の臨床例の解釈に際しても考慮しなければならぬだろう。その意味で、現代の社会のゆがみが個々の家族に顕在化しているという“一般性”の視点からの臨床的な解釈の必要性が、確認されたことでもある。

本調査の結果は、母親が娘を自分の理解者として精神的なよりどころとしていることを示す

ものでもあったが、母親が自分自身の人生の中で精神的に安定し自立した豊かな人生を送ることが、とりもなおさず、娘が母親から束縛されず、自由に豊かな娘の人生を可能にする前提条件であると言える。

最後に、本研究の問題点、残された課題を述べる。

第一には、同一の母娘・夫婦の関係を、追跡的に研究する縦断的方法を用いること。加齢に伴いライフステージが変化していく中で、母親と娘の関係はどう変化していくのか。娘の結婚や出産による母娘の関係の変化の中で、母親と夫との関係はどのように変化していくのか。本研究では、夫婦の関係が母親と娘の関係にどう関連するかという一方向的な視点にとどまるものであったが、こうした縦断的研究により、家族関係の力動的ダイナミクスを探ることができるであろう。

第二は、子どもの価値についての意識とその母娘関係の検討である。全体的な趨勢として、母親における子どもの価値の変化は否めない。しかし、現代においても、子どもの価値に対する親の考え方のバラエティーはあるであろう。例えば、「子どもが好き」、「子どもを産んでみたい」として「自分のための価値」を感じて子どもを産む母親と、「子どもを持つのが普通」、「一人前だ」として「社会的価値」と感じて子どもを産む母親があり、前者は若い世代の母親に多く、後者は年輩の世代の母親に多い(柏木・永久, 1999)。このような子どもの価値の捉え方の違いによる母娘関係のあり方を、比較検討する試みは有意義であろう。

さらにまた、一方で、娘についてはなく息子についての期待・感情に焦点を当て、息子についてのインタビューや文献に準拠し、その質的構造を明らかにする研究も望まれるところで

ある。本研究では、息子用の尺度でなければ測れないものもあるだろうことは承知で、娘用の尺度で息子に対する期待・感情を測っている。「子どもの価値」、「子どもへの期待・感情」という問題を考えるとき、娘に焦点づけるだけではなく、息子にも焦点づけた尺度で捉えるべきであることは言うまでもない。

娘、息子両方の母子関係を捉える尺度を作成し、捉え直した上で、「では父親から見たら？」と、さらに多視点からの親子関係、子どもの価値の検討が可能になってくる。こうした検討は、家族をシステム論的に捉えようとする視点につながっていくものである。家族の問題が取り上げられ、家族の行方が注目を集める今、家族システム論的に家族を捉えていくことが、必須であり、そのためにも、母-娘、母-息子という尺度の作成、標準化が望まれるところである。

## 文 献

- AERA. (1998.8/17). さみしい日本人；(1998.8/17). 親を棄てられない独身娘；(1999.4/12). マザーストーリー；(1999.4/19). 20代男のノンキャリア志向；(1999.6/21). お姉ちゃんは結婚できない；(1999.6/28). 女の子が欲しい 生み分けに走る母たち.
- 朝日新聞. (1998.9/2, 9/3, 9/4, 9/17, 9/18, 9/23, 9/25, 9/30, 10/1, 10/2). 「あなたならどうする」.
- 阿藤 誠. (1996). 親子関係から見た家族受容の行方 核家族化か個族化か. 毎日新聞社人口問題調査会(編), 「平等・強制」の新世紀へ. 毎日新聞社・第23回全国家族計画世論調査.
- 平山順子. (1999). 家族を「ケア」ということと 育児期の女性の感情と意識を中心に. 家族心理学研究, 13, 29-47.
- 井上輝子・江原由美子(編著). (1995). 女性のデータブック(第2版). 有斐閣.
- 柏木恵子・東洋・古澤頼雄・鈴木乙史・清水弘司. (1997). 青年期の自己の発達と社会文化的文脈に関する日米発達研究. 平成6年度～平成7年度科学研究費(総合研究A)研究成果報告書
- 柏木恵子・永久ひさ子. (1999). 女性における子どもの価値 今、なぜ子を産むか. 教育心理学研究, 47, 2, 170-179.
- 柏木恵子・若松素子. (1994). 「親となる」ことによる人格発達 生涯発達の視点から親を研究する試み. 発達心理学研究, 5, 72-83.
- 柏木恵子・数井みゆき・大野祥子. (1996). 結婚・家族観の変動に関する研究(3): 結婚・家族の性差および世代差. 日本発達心理学会第7回大会発表論文集, p.242.
- 厚生省. (1993). 出生動向基本調査
- 町沢静夫. (1998). 「壊れもの」としての家族. 大和書房.
- 中村延江. (1994). 愛しすぎる悩み、愛されない不安 母と娘の心理学. 廣済堂出版
- 中山まき子. (1992). 妊娠体験者のこどもを持つことにおける意識 - 子どもを<授かる>・<つくる>意識を中心に -. 発達心理学研究, 3, 51-64.
- 日本女子社会教育会. (1995). 家庭教育に関する国際比較調査報告書.
- 信田さよ子. (1997). 一卵性母娘な関係. 主婦の友社.
- 信田さよ子. (1998). 愛情という名の支配. 海竜社.
- 高石浩一. (1996). 母を支える娘たち. 日本評論社.